

一枚の絵が生れるまで

品川幸恵

入園した頃のK君は、保育室の中央に坐ったり、ロッカーの中に入りこんでは、周りを注意深く見回してしました。「外に遊びにいかない？」などと誘うと安心したように笑い、私の隣りでスキップするようになって来るのですが、何か、ぶつぶつ言っているのによく聞いてみると、「何で幼稚園なんかあるんだよ。どうして幼稚園になんか来なくちゃいけないんだよ。こんな幼稚園つまらないよ。バスもないじゃないか。歩いて来るのは疲れる。」と、早口でちよっと口を曲げ横目でにらむように話すのです。

砂あそびに誘ってみると、他の子は砂の感触にとびつき、サラサラとした白い砂や冷たいドロドロの砂に歓声

をあげていましたが、K君だけは砂場の太い鉄柱に寄りかかっただけ、身動きひとつせずうつむき加減に横目でにらんでいました。「K君、気持ちいいわよ、素足になつてみない？」と声をかけると、「きたねえからやんねえよ。よくそんな事やれるねー。きたねえからよいかよー。」と言うのです。「冷たくってニョロニョロしてて面白いわよ。」と、どろどろの手を見せると、驚いた顔で見えてきました。今まで汚れて遊ぶ経験をした事がなかった様です。そのうち、近くの子の泥がK君にはねてしまうと本当に困った顔をしてうつむいてしまい、目にはジワッと涙が浮かんできました。「汚すとお母さんに怒られるんだからナー。」と言いながら汚れた所を一生けん命こす

っているのです。」「K君大丈夫よ。先生からお母さんにお話しするから。K君のお母さん優しいから分かってくださるわよ。」と言うと、「お母さんなんてやさしくないもん。ぼくが何かすると、すぐ怒るんだからな。」と目からポロポロと涙を流しながら言うので、「帰るまで乾くように、こっだけ洗おうか?」と言うと、「いい。」と頑なに拒み、一センチ四方くらいの泥はねをしきりにこすっていました。

また、他の子がひざの上ののっけていても、おそらく今までお母さんのひざは赤ちゃんだけのものだったK君には信じられないようで、「お前、赤ちゃんじゃないのに、なんでダッコしてるんだよ。おかしいぞ、お前は赤ちゃんだ。」と、ひざの上の子の目の前に、人さし指をつきたてて早口で言うので、「幼稚園では先生がみんなのお母さんだから、ちっともおかしくないのよ。ヒザの上っていい気持よ、K君も坐ってみない?」と話す、
「いいよ、僕赤ちゃんじゃないからな!」と怒ったようにいってロッカーに入りこみ、じっと私達を見ていました。また「今何時?」「お帰りまであと何分?」と十分きざみに聞いてきます。降園時間になると人より早く

身仕度をし、周りの子どもに「お帰りの時間だよ。」と叫ばったような大声で伝えるのでした。

幼稚園生活の中でも特に自由な時間が彼にはとつても苦痛のように見えました。自分の家の近くの仲よしの男の子はみんなバスで送り迎えのある別の幼稚園へ行ったのに、なぜ自分だけこの幼稚園にこなくちゃいけないか、幼稚園には知っている友だちもいない、家に帰れば友だちと遊べるし、好きなおもちゃもある。家の方がずっといい。友だちと同じ幼稚園に行きたいのに言ってもお母さんは聞いてくれない。大人は僕の言う事なんかちっとも聞いてくれないんだ。と言っているように思えました。

そんなK君が反応を示したのは、怪獣ごっこでした。男の子数人と私が戦っていると、彼も突進してきました。「K君やったな。」とむかっていくと、「どうだ、僕のパンチは強いだろ、ザマーしろ。お前なんかやつけてやるからな。」とぶつかって来、少しでも不利になるとつねるのです。それは彼の内側にある不満や怒りなどうっせきしたものを外にはき出しているかのようでした。つねられた痛みよりも、K君とのつながりがやっ

見い出せたようで、その日私は満足していました。そして六月ころまでそんなくり返しが続き、そのうちにK君は自分から私にダッコしたりオンブしたりされるようになってきました。私は、彼の変化が嬉しくて、ヒザの上の彼の重みがこちよく、彼も、ヒザや背中であちよつと照れながらも、「いいだろう。オンブしてもらったぜ」と周りの子に眩くようになってきました。自分で「赤ちゃんみたい。」と言いなながらも、心の奥ではK君自身それを望んでいたのです。ことばと反対の彼の内側が、少しずつみえるような気さえしてきました。

ところが、それが一ヶ月以上毎日、毎日、執拗に続き、「ダッコしないとつねるからなー」「オンブしないと噛むからなー」のくり返して、ダッコしても腕をつねっては、「これ痛い?」「これは?」と、私のいやがる事を、これでもか、これでもかというようにやってくるので、はずんだはずの私の心はたちまちペしゃんこになり、K君の存在がうとうとしくさえなってしまうしました。時には逆に思い切りつねってやりたい気持ちにかられた事も何度もありました。しかし私が少しでもそんな様子を見せると、彼はサツと私の心を読みとり、ロッカー

の中に入りこんでしまうのです。大人への一種の不信感に包まれた彼は、私がいっただいどこまで自分を受け入れてくれるのか試していたようです。そして、初めて自分を受け入れてくれそうな大人のぬくもりを味わい安心したり、自分の力をみせつけたり、そして楽しい話題の乏しい彼は、つねったりしながらも自分の方に私の気持を向けようと必死だったのかもしれない。

頭でそうは考えてみても、短気な私は、軽く聞き流したりすることができず、彼と一緒にいるとイライラし、つい避けてしまいたくなり、自分の未熟さ至らなさを感ぜずにはいられませんでした。そしてKが休みだったり、そばにいなかったりするとホッとするのでした。

そんな私の心が敏感なKに通じないはずはなく、そのうち廊下の壁によりかかって無表情で、どこを見てもなく立っていることが以前よりも増えてしまいました。私が誘うまで何時間でもそうしていました。しかしちょうどその頃、彼一人ではなくM君も一緒に同じように廊下に立っていたのです。このM君も全体で課題を与えられると喜んで活動するのですが、自分から遊ぼうとはせず、いつもK君と私のそばに坐っては、私たちの遊ぶの

をニコニコ笑って見ている子どもでした。しかし、Mの場合は印象が円満で、いつもニコニコしています。クラスの友だちからMへの誘いが多いのですが、Mはそれのことわりきれずに涙ぐむことがままありました。

話しかけられなければ話さず、それでもいつもニコニコしているM君と一緒に、K君は何も話さずに表情を変えずに一メートル位ずっと離れて何分でも立っているのです。声をかけられるのを待っている様子もあり、いつ声をかけようか、壁に立つ前に何か遊びを紹介しようかなど考えるのですが、私は無意識に心の奥で彼を遠ざけていたのかもしれませんが。もちろん、彼が好きな怪獣ごっこや、すもうなどをする時は、「やるやる、」と駆けよっては来ましたが……。

そんな一学期の後半、初夏を感じさせる日差し暑い日のことでした。私が砂場で遊んでいると、砂場の柱に寄りかかっていたK君が小声で「僕もやってみようかな」とつぶやきました。私はブルッと身体が震えました。あのK君がやっとな……という喜びが伝わってきました。「冷たくって気持ちいいわよ。」と言うと、自分からイソイソと靴をぬぎ泥の中にとびこんできました。砂の穴

の中に入り、僕の足もうずめてくれ。」。「あー、抜けなくなつた、助けて、くすぐったーい。」。「今度は、お前を埋めるからな、どうだ、」などと大声をあげ、私も彼も興奮状態でした。それから毎日が砂遊び。「早く砂場に行こうよ。」と、K君に手をひかれる日々が続きました。砂あそびの最中にも、彼は私の目の辺りに指をさしだして、「バカだな、お前は、そんな事も知らないの?」などと話しかけてくるのですが、それでも少しずつ泥の感触が心を柔らげてくれていることが砂とふれているKの目の輝きから感じとれました。

Kは自分ができることには、他の子を押しつけてでも「こんなの簡単だよ、できるよ、貸してごらん。」と意欲的に取りくみ、反対にできない子がいると、「え?、こんなのできないのバカじゃないの?」と笑うのです。そして新しいことや自分ができないと思うことには、全くといたいたいほどとりくもうとしません。

例えば、逆立ちをしている友だちの足を私が押さえている時、彼もじっとそばで見えています。声をかけると、手を横に振って後ずさります。しかしずっと見ていて、最後のひとりになって周りに子どもが誰もいなくなる

と、「やる!!」といつて来るのです。それまで彼は心の中で「僕にできるかな。できないかな。失敗したら誰かに笑われないかな。」などと、考えているのでしょうか。そして、周りに誰もいなくなつて初めて、やってみようという気持ちになれるようでした。周りの目を必要以上に気にするプライドの高いところがありました。

したがって絵や製作のように形に表われることはほとんどやろうとしません。Kの頭の中で、こう描きたい、こう作りたいたいというイメージがあまりに立派で大人っぽいので、自分の技能がそれについていけず、自分自身で自分の作ったものに満足できないようでした。彼はそんな自分自身に腹を立て、「できないんだよ。」とか、「手が痛い。」と涙ぐむのです。

また、園内で飼われている小動物への接しかたにも特徴がありました。名前に興味をもって図鑑とひきくらべたりするのは早いのです。保育室のザリガニを何日もあきずに見つめていて或る日突然「先生、水こんなにいっぱいじゃ死んじゃう。石入れておかないと、隠れる場所がないじゃないか。」と言いますので、「じゃ、ちょっといっしょに手伝ってもらえないか?」ともちかけると、

「ボクはいいよ。いいよ。」と手を振りながら逃げてしまいます。その後友だちたちが、さんざんさわつたザリガニの中の一匹を、そーつとつまみあげたK君の手は、なんとブルブルふるえておりました。知識的な興味や関心をもつことと、実体験の違いの大きさをK君のふるえる手が私に教えてくれたように思いました。二学期はそんなKをただ見守ることの多い日々でした。

そして三学期、今まで友だちがなかなかできず、自分から友だちに近づこうとしなかったK君が、二学期ごろからM君と少しづつ話すようになり、ある日、園から帰つてから約束してK君がM君の家に遊びに行ったというのです。そして、その日から二人はまるで今までの二人と別人のように、M君もホッペを赤くしながら積極的に話し、K君も負けじと楽しそうに二人でうなずきあいながら話しあうようすがみられました。

「きのう、M君の家へ行つたんだよ。ナッ」「そうだよ、ナッ。」「そして、ケシ取りかえっこしたんだよナ。」「M君の家つてすごいんだ。ケシ、こんなにいっぱいあるんだぜ。」などなど……二人は、目をキラキラ輝やかせ、つばをとばしながら次から次に話してくれました。二人の

変化にはおどろきながら、はずみのついたその話に時を忘れるように聞きいったものです。すると今まで、怪獸ごっこを見ているだけだったM君が、K君と一緒に力いっぱいぶつかってきたり、今までのK君とのイラだちがうそのように思える楽しくて心地よい毎日がやってきました。友だちの大切さについて改めて私も考えさせられ、二人が慎重に友だちを自分で捜しあてた喜びを傍にいた私でさえじゅうぶんに感じさせられたのでした。

冬の日、園舎の屋根を見上げて、「サンタさんは、屋根の上を通ってくるかな。となかいにのってくるのかナア。」と、うたうように呟くの聞いたこともありました。情緒的にも柔らかい、夢のあるイメージをもっているのを感じました。

そして三月、もうすぐ年長組に進級というある日、絵の具を使う機会がありました。M君は描いた後、他の友だちと外へ出て行ってしまいました。「ボク、絶対やらないヨ。」ときつきから何度も同じ言葉を繰り返しながら私の周りをウロウロするK君。真面目な彼は、他の人がやったことを自分がやらないということに耐えられない様子でした。そうだ、今のK君なら大丈夫！ 私はちょ

っと押しみることにしました。「K君ならできるよ、やってみよう！」少し語調を強めると、大きな目に涙があふれ、「手が痛い！」と言いはじめました。いつもそうやって逃げてばかりいては……と私はそれでも押しませんでした。私の心の中ではもう大丈夫という確信と年少ももう少しで終わりという焦りがありました。しかし、彼は「きのう、ぶつかった手が痛い！」と涙をこぼしながら繰り返し、どうしてもやるうとしません。私はその場を離れなければならぬ用事ができて、しばらくしてから戻ってみると、彼は、涙も乾いた顔で笑いながら私のそばにきました。「手はもう直ったの？」と聞くと、「へ？ あれウソだよ、へへべかだなーだまされた！」と、いつものように人さし指で人を指しながら笑う彼を見て、私は悲しくなりました。いつもこうやって自分のいやなことから逃げるような子になってほしくない！ そんな気持でいっぱいでした。ふたりで園庭の鎖に腰かけながら、私は何とか彼にこの気持を伝えたいと思いました。

「あのねK君、これからK君年長組になるでしょう？年長になっても、いやな事やできない事たくさんあると

思うの。でも、今みたいにできないからって、やらないでいる？」彼は、困ったように下を向き、首を横に振りました。「できないことって、ちっとも恥ずかしいことじゃないんだよ。先生だってできない事たくさんあるし、そんな時は園長先生や他の先生に教えてもらうんだよ。K君は力も強いし、やればできると思うの。それなのにやらないでいるのは、心が弱いんだと思う。できないことよりそっちの方がずっと恥ずかしいことだと思う。先生はK君にそんな弱い人になってほしくない。分からないときは、教えてって言ってくれれば、先生の分かることは喜んで教えてあげるから……。」そこまで言うのと、私は声がつまり涙がこみあげて来ました。気がつくるとK君の目にも涙があふれ、ボタンと一粒手のひらに落ちました。しばらく二人で何も言わずにおでことおでこを合わせていました。今考えると私は何て、直線的な言い方だったんだろうと思います。その時の私の総てをぶつけた言葉でした。そして、彼もそれを吸いとってくれたように感じました。

それからしばらくたったある日、私は絵を描く機会をつくりました。私の気持のどこかに、K君の気持を確か

めたい……そんな願いがあったのかもしれない。私は祈るような気持で画用紙を配りました。そんな私の心に答えてくれるかのように、彼はためらうことなく自然に絵に取り組み、そして彼にとっては初めての一枚の絵を描きあげました。それは顔から足の出ているひとの絵で彼の満足のいく作品ではなかったかもしれないが、表情があり、画面の中央に大きく描けていました。私はその絵を見た時嬉しくて胸がズンと震えました。「頑張ったね。」「やっぱりK君で来たんだね。」「勇気が出せたね。」「……」などいろんな言葉が私の頭の中に浮かんで消えていきました。結局私は、自分の気持を伝えるべき言葉が見つからないままK君の方を見ると、K君も私を見ていました。こみあげてくるものをこらえながら、黙ってうなずくと彼もうなずきにつこり笑いました。

K君が脱ごうとして脱げない自分の殻のなかでもがいていて、初めて外界に向かって素直に自己実現する快さを自分できりひらいた記念碑として、K君の描いたあのときの、あの絵はそれから何年たった今でも私のイメージにはつきりやきついている大切なたった一枚の絵なのです。
(所沢市立第二幼稚園)